

国立民族学博物館研究報告別冊 no.016; まえがき

著者	石毛 直道, Ishige Naomichi, イシゲ ナオミチ 井上 忠司, Inoue Tadashi, イノウエ タダシ
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	016
ページ	i-v
発行年	1991-12-25
URL	http://hdl.handle.net/10502/3597

ま え が き

研究の意義

本書は、国立民族学博物館の特別研究「現代日本文化における伝統と変容」プロジェクトの成果の一部である。

この一世紀のあいだに、日本人の食卓は、銘々膳からチャブ台をへて、現在のダイニング・テーブルへと移行した。そんな食卓の変化におうじて、食卓上にならべられる食べ物の種類や配膳法はもとより、食事まつわる作法なども大きく変わってきた。そしてそこには、家庭内における人間関係のありようの変化が、端的に投影されている。

かつて銘々膳（お膳、箱膳など）での食事の場面は、上座と下座の順序や、家族と使用人などの別がことのほか重視され、江戸時代からつづく「家」の秩序を反映するものであった。かわって登場したチャブ台（飯台、シッポク台をもふくむ）は、明治の後期から大正、さらには昭和の初期にかけて、おもに都市部のサラリーマン家庭を中心に普及したといわれる。

チャブ台は、家庭のメンバー全員がおなじ食卓をかこむという、まことに画期的な食事の形式であった。ために、堺利彦（『家庭の新風味』明治36(1903)年刊）などの識者たちは、はやくも明治の三十年代にこのチャブ台に目をつけて、「家庭の和楽」や「一家団らん」の思想をたからかにうたいあげ、その実現に期待をよせていたのだった。しかしながら、現実の家庭では、たとえチャブ台をかこんでいたとしても、はたして団らんを楽しむ雰囲気¹で食事がおこなわれていたかどうかは、はなはだうたがわしい。チャブ台の普及は、おそらく、そんなイデオロギーとは別の理由なのであって、むしろ戦後に普及した現在のダイニング・テーブル（椅子式テーブル）において、期せずして、堺らの理想とした食事形式が実現したものとおもわれる。

家族のメンバーが一堂にうちそろう食卓でのふるまいかたは、家族関係がもっともよく象徴される情景のはずである。にもかかわらず、この共食の場としての家庭という視点は、従来の家族研究の領域において、なおざりにされつづけてきた。また、物質文化としてのチャブ台についても、不明な点がすこぶるおおい。チャブ台という型式の食卓は、いったいどのような過程をへて実現したのであろうか。チャブ台の普及時期にかんする地域差や職業差などについても、これまでのところ実証的な調査例は

ない。

——というわけで、われわれは、とくにチャブ台の時代を中心にして、学際的かつ本格的な共同調査にとりくむことにした。本研究は、食卓という装置の変わり目に着目することをとおして、わが国における家庭の歴史の一端を浮き彫りにしようとする、いわばもうひとつの現代日本文化史の試みにほかならないのである。

研究の経緯

食卓文化をめぐる共同研究班は、石毛直道（国立民族学博物館）の提唱で、さきの特別研究「現代日本文化における伝統と変容」プロジェクトの一環として、昭和58(1983)年に結成されたものである。

発足の当初は、文化人類学の立場から食事文化研究の開拓につとめてきた石毛のほか、文化心理学の立場から家庭問題の研究にたずさわってきた井上忠司（甲南大学・民博客員）、文化史学の立場から食事や茶道の歴史を追究している熊倉功夫（筑波大学）、民俗学の立場から生活文化の研究にとりくむ芳井敬郎（花園大学）の4人を出発した。翌59(1984)年には、生活学の立場から住居空間や道具の研究をおこなう山口昌伴（GK道具学研究所）が参加。さらに63(1988)年からは、物質文化論の立場から生活用具の設計・デザインを研究している車政弘（九州産業大学）と、おなじく物質文化論の立場から食物史を研究している植田啓司（大阪青山短期大学）がくわわって、7名のチーム構成で今日にいたっている。

われわれは、いくども共同討議をかさねたすえに、まず、(1)ここにいう「現代」とは、いちおう20世紀をさすものとする。 (2)いま調査しておかねば、もはや取り返しのつかない「銘々膳からチャブ台へ」の時期を中心にすえること、などを確認しあった。そして、次のような3つの課題の究明をめざして、文献調査と実態調査とモノ調査をそれぞれにおこなうことをきめたのである。

第1は、文献（と実地踏査）にもとづきながら、食卓文化——わけてもチャブ台の系譜と変遷をあきらかにすることである。作業は、食卓での配膳法の変化をめぐる、すでいくつかの論考を発表している石毛を中心にすすめられた。

第2は、なんらかの実証的な調査をおこなって、食卓生活史の実態をあきらかにすることである。明治以来わが国の家庭では、いったいどのような形式で食事がなされてきたのであろうか。記録文書のたぐいは、ほとんど皆無にちかいのである。われわれは聞き取り調査を工夫して、その空白をうめるほかあるまい。そんなねらいにもっともふさわしい方法として、「家庭の食事にかんするライフ・ヒストリー調査」を考

案し、実施することにした。データの収集と解析の作業には、井上を中心に、熊倉と芳井がおもにあたった。

第3は、国立民族学博物館をはじめ、全国各地に収蔵されているお膳やチャブ台をしらべることによって、物質文化的な資料を整理し、分析することである。われわれはできうるかぎり現地へ出かけて行って、いろいろな機関や民家などに収蔵されている食卓の写真をとり、製造技術や使用法についての証言をあつめることにした。作業には、山口を中心に、車と植田がおもにあたった。

この共同研究の結果を集大成したのが本書である。なお、この報告書刊行以前に、研究チームのメンバーたちが執筆した論文がいくつも発表されている。石毛 [1984, 1989, 1990], 井上 [1984, 1989a, 1989b, 1990], 熊倉 [1989, 1990], 山口 [1989], 植田 [1985], 車 [1985] などで、このまえがきの末尾に書誌を掲載しておこう。いずれも一連の研究の中間報告としての性格をもつものではあるが、ひろい意味での食卓研究として、それぞれの筆者が共同研究の枠組にとらわれず自由に書いたものなので、本書では述べられていない論点もおおい。参照いただければさいわいである。

本書の構成

本書はⅠ～Ⅳの、4つの部からなっている。ただし、第Ⅳ部は「資料編」である。

第Ⅰ部の「食卓文化論」(石毛担当)は、食卓をめぐる旧来の諸説を再検討することをおして、空間においては東アジアのなかに、時間においては古代・中世のチャブ台前史にまでさかのぼって位置づけながら、あらたな理論の展開を試みたものである。本書の全体に一貫して流れるモチーフは、「20世紀の日本文化にとって、チャブ台とは何であったのか」という問題の究明であった。第Ⅰ部はその序論であり、かつ総論でもある。

第Ⅱ部の「食卓生活史の調査と分析」(井上・熊倉・芳井担当)は、70才以上の女性を対象として、銘々膳とチャブ台と椅子式テーブルの3つの段階ごとに聞き取った質的データをもとに、食卓生活史の全貌をあきらかにしようとしたものである。得られた284例のデータにもとづく質的分析では、家庭と食卓をめぐる情景の変化を、なるべく具体的かつ生き生きと描きだすようにつとめた。また、質的データはコンピュータ処理によって、量的データにも変換された。そんな量的分析からは、銘々膳からチャブ台へ移行した時期や、食事中の作法の相違など、全体的な傾向についても、いくつかの興味ぶかい事実を発見している。

第Ⅲ部の「物質文化としての食卓」(山口・車・植田担当)は、現地におけるモノ

調査をふまえながら、物質文化としてのお膳やチャブ台の歴史と性格をあきらかにしようとしたものである。すなわち、絵画資料などを手がかりにしてお膳の歴史が語られ、特許出願の明細資料をもとにチャブ台の歴史が説きあかされていくとともに、チャブ台の生産の現場からの証言と製作技術の過程をくわしくしらべることによって、チャブ台の性格があらわにされているのである。

第Ⅳ部の「資料編」は、聞き取り調査のデータ集（井上・熊倉・芳井担当）と、民博などに収蔵されている食卓の物質文化的な資料集（山口・車・植田担当）の、2つの部分からなっている。前者のデータは、スペースのつごうで、50例のみ全文をかかげることにした。番号（No. 1～No. 284）は、整理と引用のうえて便宜的につけられた数字であることを、一言おことわりしておきたい。

本書が成立するまでには、おおくの方がたのお世話になっている。財団法人「味の素食の文化センター」の研究助成金をいただき、調査費用の一部にあてたことを記して、感謝いたしたい。聞き取り調査は共同研究のメンバーが関係する大学の学生たちに依頼しておこなったが、この調査に興味をもたれた故国立民族学博物館教授守屋毅博士は奈良女子大学の学生たちを調査者とするデータを収集してくださった。この報告書を守屋さんに読んでいただけなくなったことが残念である。聞き取り調査のコンピュータ処理に際してご協力をたまわった甲南大学の森田三郎教授と元岡尚子さん、編集の事務を助けていただいた石毛研究室の河合由佳さんと上出みちるさんと福島みさきさんに、あつくお礼を申しあげる。

おわりにのぞんで、いちいちお名前をあげることはさしひかえるが、めんどろな調査にあたってもらった学生諸君と、これまた、めんどろな聞き取り調査・モノ調査にこころよくおうじてくださった方がたに、あらためて深謝の意を表したい。

本書が、学界に一石を投じることができるとともに、情報を提供してくださった方がたへの返礼ともなりえていれば、さいわいである。

平成3(1991)年3月

石 毛 直 道
井 上 忠 司

文 献

石毛直道

- 1984 「食卓の変化」祖父江孝男・杉田繁治（共編）『暮らしの美意識』（所収）ドメス出版
1989 「東アジアの家族と食卓」山口昌伴・石毛直道（共編）『家庭の食事空間』（所収）ドメス出版
1990 「食事作法と食事様式」井上忠司・石毛直道（共編）『食事作法の思想』（所収）ドメス出版

井上忠司

- 1984 「茶の間文化論」祖父江孝男・杉田繁治（共編）『暮らしの美意識』（所収）ドメス出版
1989a 「食卓の家庭史」井上忠司（著）『「家庭」という風景——社会心理史ノート』（所収）日本放送出版協会
1989b 「食事空間と団らん」山口昌伴・石毛直道（共編）『家庭の食事空間』（所収）ドメス出版
1990 「食事作法の文化心理」井上忠司・石毛直道（共編）『食事作法の思想』（所収）ドメス出版

熊倉功夫

- 1989 「食卓の変遷と食事作法」山口昌伴・石毛直道（共編）『家庭の食事空間』（所収）ドメス出版
1990 「前近代の食事作法と意識」井上忠司・石毛直道（共編）『食事作法の思想』（所収）ドメス出版

車 政弘

- 1985 「国立民族学博物館所蔵の韓国の収納家具——その技術とデザイン」『国立民族学博物館研究報告』10-2

植田啓司

- 1985 「日本の正式な膳について」石毛直道（編）『論集 東アジアの食事文化』（所収）平凡社

山口昌伴

- 1989 「食べる営み——時間・空間・人間」山口昌伴・石毛直道（共編）『家庭の食事空間』（所収）ドメス出版